

# 山とスキー

oooooooooooooooooooo

第三十一號



大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
大正十二年十月三十日印刷納本

大正十二年十一月一日發行

札幌山とスキーの會發行

第三十一號目次

記事

雪の札幌岳連山

岡村源太郎 (二)

山想斷章

加納一郎 (四)

西部北海道に於けるスキー地

平塚直秀 (六)

「雪の名稱に就て」の私見

六鹿一彦 (一五)

衆報抄録

寫眞

光と影(五色附近)

岡部長量 (一〇—一一)

雪は一日一日と近づいて参ります。  
スキ一の御用意は是非當店へ



小樽市稲穂町大通

梅屋運動具店

電話八九六八番 振替小樽七〇番

豊富な積雪!!  
潤澤な斜面!!  
充分の設備!!

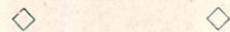
五色温泉

山形縣西置賜郡上山村

宗川旅館

Mizzi Langer Kauba

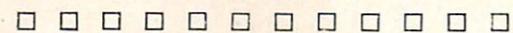
Wien, Oesterreich



Kochapparat

Steigeisen

Ski



マ リ ヤ 運 動 具 店

東京 京橋區南傳馬町三丁目

大阪 北區堂島北町六番地

福岡 博多片土井町二十一番地

目録進呈



特約店募集

秩父宮殿下

台覽品御買上の榮を賜ひ  
献上品御嘉納の榮を賜ひ  
美津濃式登山用品を是非御召用此

専門大商店

東洋最大

美津濃

運動用品店

大東神  
阪京戸

東京神田  
神保町

冬のアルペンには吾等の心を魅さすには置かない多くのものがある。峰々は冬に於ける程それほど冷厳な姿をしてゐる時はない。

氷河の沈黙の冬に於ける程それほど侵されざる時はない。そして冬の太陽は吾等に適度の暖かさを與へて決してその熱で吾等を悩ますことはない。そしてその上に冬の少しの衝動もなく柔かき雪を滑つて進みゆくスキーの快よい登行は、夏に於ける堆石モトコの小徑の硬き不快な衝動やフイルンの燃える雪の上の疲れ易い、苦しい歩行をたゞ悪夢の如き記憶を以つて回想せしむるのである。スキーを以つてこそ始めて吾等は完全に愉快に冬の高山に近づき得るのである。寂寥たる谷々のその何者も未だ觸れざる清淨な雪面に最初のシュプールを引いて、高く登りゆくことの如何にたのしきことぞ！ 冬のアルペンには峰々が春にも、夏にも深く秘め隠したその秘奥の姿を眼にし得るよろこびに加へて、其處にはまた吾等の知れる限り最も美しい運動の大なる法悦があるのである。(Dr. C. Högler.)

# 雪の札幌岳連山

岡村源太郎

札幌岳から東南に、更に南に走つて支笏湖畔まで達して居る一一〇〇米内外の尾根は、別に狭薄岳、空沼岳、漁岳、小漁岳等の小隆起となり、此處に所謂純粹のスキーギツフェルを連ねて居る。札幌よりは山頂まで一日乃至二日行程であつて、殊に或ものは極めて便易な登り口を有し、我々が札幌近郊に於ける滑走地として見逃し得ぬ所である。高さは漁岳の一三二〇餘米を最高とするのみで、従つてスキー登山に際しては、之等の山は全て殆ど同一の状態を示し、雪質、雪量或は森林、尾根の状態が滑走に對して與ふるものは殆ど差異を認めぬのである。

併し之は全体として見る時に札幌岳連山なる一グループとして考へ得るのであつて、スキー登山に於ける全然單純さを示すのではない。相當の享樂あるは勿論、我々が容易に接し得る山として、スキー登山の研究にも少からぬ便利な點がある。今私がこゝに書かうとするこの山の記事も、淺い經驗に附加せられたものを記するのであるから、筆の拙い上に、雪質その他の状態をも徹底せしむる事は不可能であらうが、幾分なりとも此處の様子の季節によつての變化でも見ればよいと思ひ、今年二月から四月にかけての登山の記憶を辿つたのである。充分なる成功は收めてないが、この山に於ける活動の半分位は遂げた積りで書き連ねた。

## 二 月 (札幌岳)

之を一月にやらなかつたのは残念であつた。私も行ける程の自由な身でなかつたし、天候も簾舞まで出て行きがひのあ

るやうな日は少かつた。併し嚴冬の札幌岳連山もたしか他と異つた趣を有するにちがひない。この二月の行で一月に入りたいといふ感を稍深くせしめられた。

二月も十四日となれば、既に寒中過ぎの暖みが漲つて居る。その上近來にない好天氣なので、天氣運の悪かつた一月に惱んで居た我々は大変うれし。三十分も遅れた定山溪行で、而も自分はこの三十分遅發の恩恵を充分に蒙つて、十時半豊平を出發した。明日目的として居る札幌岳―空沼岳尾根の後ろには、狭薄岳が白く輝いた。マイネシリの大きなスロープは現はれたと思ふと、間もなく黒い山陰けに隠れる。板さん等に共に、自分が始めて恐ろしいボーデンを知つた三段山の南面は、小さな雪崩でシュバルテが出來て居た。

簾舞で降りて、腹をこしらへ、青空の下を身に汗して盤ノ澤に向ふ。マイネシリの代りに今度は余市の眞白な姿が暫く眼につく。雪は餘り好くなく、一寸した塗蠟は何にもならない。併し餘り徹底的に塗ると明日四つんばいにならねばならぬ。海豹皮を付ければ滑り過ぎるスキーでも大丈夫であらうが、こゝ等の山のやうな森林中のコースの長い所では、仲々海豹皮は不愉快である。塗蠟は餘程考ふべき問題である。殊に一つのパーティに於て塗蠟程度の甚しき相異は、隊の統一が欠け易くなるから。

濕めつほい雪も二時の聲を聞くともう、北面の斜面ではスウィングにもつて來いの雪となる。雪の浅い時は、稍濕氣ある雪の方がスウィングがやり易い氣もする。いゝ所を見付けて、お決まりのテレマーク、クリスチアニヤをやる。次第に平地の雪も好くなり、スキーは軽く、盤ノ澤へのゆるい勾配を進んだ。

盤ノ澤農家に落付いてからも、疲れるのも忘れて附近のスロープで盛んに遊んだ。申分のない粉雪が、夕方近くになると冷やかに飛ぶやうになる。こんな享樂の出來るのも一月二月だけである。雪質の變化は、三月に入つてからの人里近くでの快走を許さなくなる。若し出來るにしても、吹雪の跡でもなければ殆ど粉雪等は望まれぬ。夕刻更に札幌から平地滑走の二人の友を加ふ。

翌十五日は曇天。札幌岳の頂上は動もすれば見失ひそうだ。併し登るには決して不平云へぬ天氣。時間さへあれば樂に空沼岳まで抜けられる。始めての山であるから、ベストコースは判然として居らぬが、最もコースを緩く取れる簡單な、盤ノ澤から定山溪に通ずる夏道を半分辿る事とする。それから尾根傳ひに札幌岳の頂上に向つて林をくぐるのである。

農家の朝食の仕度や辨當が意外にまでどろ気がいらくした。心ならずもぐずぐずして、其處を出たのは殆ど九時に近かつた。気温は大部高くなつて居て、かなり汗に悩まされたが、雪は浅くて好い。スキーは軽い。次第々にシュプールが伸びて黒い森の中に吸ひ込まれて行くのは何とも云へない。登高の快は浅雪にスキーのエツヂが適度に食ひ込むその氣分である。この時はもう森陰にあつて我々は適當の冷味にひたりつゝあつた。併し之も長くは續かぬ。雪は深く重くなつて来た。夏道に沿うてついで居る伐木道の馬橋道にそろく入りたくなる。併し段々急になるスキーの爲めに、橋道もスキーでは登りにくくなる。殊に急坂の橋道をほんやり登る事は危険で、何時巨大な材木を曳いた馬が飛び下りて来るか不安である。場所によつては餘程注意して進まねばならぬ。固くなつて居る道の表面は、スキー靴のみでも登りにくくなる。底にナイゲルが附いて居れば大變好からうが、そうなるにスキーがアルパイン式のみに制限せられてしまふのではなからうか。

兩側の急なズントに不愉快なヂックザックをとり、やかてエツの枯れた下枝等と戦つて、大部無駄のエネルギーを使ふ一段と急な而も誘惑的のズントを横切りつゝ、そこに詣かるべきボーゲンを數へ、遂に定山溪側を望み得る尾根に取付く。急な尾根は雪庇の爲めに、登高は大部難儀らしい。尾根の緩くなる所に出ようと、定山溪側の森林中を暫く進む。さて雪質は一變して更に不愉快な一時間が續かねばならなかつた。幾分濕氣を含む細い結晶性のザラメになつて居て、森林中のヂックザックは甚しく困難にせられた。極端な横滑り及び後滑りを促し、又積雪量の少い爲めアツシユに妨げらるゝ以外に、樹木の下に形成せられて居る空洞にスキーが落込む。後滑りに對しては有利であるラツセルは、反つてこの空洞の爲めに多く悩まされた。

豊平本流を境界として、この山一帯はたしかに積雪はない。そしてこゝは他の山（手稻、余市、ムイネシリ、青山温泉附近）のその年によつての積雪の多少に對して、之と同一歩調をとりにくいやうだ。札幌市が稀の大雪だから等と思つて行つても、簾舞あたりの低い山は雪が少くてスキーが大變悪い事もあつた。こゝから更に南に下つて、支笏湖の領域に入ると又一段の減少を示して居る。この雪の多少は時によつては、甚しく登陸時間の變化を來さしむるものであつて、之ミバーティの技術の程度をも餘程考へねばならぬ事がある。

併しスキーギツフェルを志す時、主としてその行程に重大な關係を有するのは、天候を除けば雪質であらう。複雑な地

形の所にあつても、好状態の雪の下に於ては、全く自由なコースを取り得る。此處の森林中に出逢つた雪は、風の影響が大いなる爲に成つたのであらうと思ふが（西北風を直接受ける）春雪に大部近いこの結晶雪も、悪い雪とは決して云へぬ。適度の傾斜のスキーにあつては、愉快なスウィングを與へてくれる雪である。併しこの西向きの急斜面にあつては、反つてその滑り好き事が我々に甚しく不利を與ふるものとなつたのである。

雪庇近くに至るにつれて、スキーも緩くなり、エツ、白樺は大きくそして粗になつて来た。悪い天氣ながらも暫く太陽が薄雲から朦朧たる光を出す。雪面は明るなる。巨大なエツを包む雪塊は明瞭に陰陽を與へらる。風に吹き拂はれたエツよりの雪は、白煙となつて一塊の霧が襲ふたやう。それが日光に輝く。友の姿は樹幹を縫ふて、左にキックターン、右にキックターン。時には白煙の中に吸ひ込まれて行き、洗禮を受けたその姿が雪面に影を投げる。眺望の全くない今でもこゝに於ける氣分は全く忘れ得られぬものであつた。

十二時、尾根の上に出で、例の如く雪庇の波状雪に翻弄せられつゝ、只管主峯さして南へ。美しい純白の花を想像し得る。偃松に飾られて居る主峰のスキーは、中腹以上を霧の中に隠して居る。そのスキーの下は今我々が辿りつゝある尾根から一段低下して居る鞍部であつて、そこを埋める白樺の純林が次第に眼下に見降されるやうになつた。雪は次第に細くなつて粉雪に近づき、鞍部に降る時は立派な粉雪となつた。軟かな雪面に九本のシュプールが交叉し、エツを縫ひ白樺に入り、やがて一本のジックザックへと再び收斂する。廣いスキーを靜かに進む。雪は風によつて形成せられた冬季の山頂附近に於てノルマルなるクルステである。シュプールが次第に付きにくくなる。がりくに雪にいちめられて居る偃松、固く雪に包まれて一點の緑をも見出し得ないエツの孤木に、僅かなりとも高く登つたといふ氣分になる。スキーのゆるい割合に、比較的多くの努力をして、三角臺下に立つたのは午後一時。

霧の間から時々日の光がほんやり漏れて来て、大地は急に明るなる。霧の中に立つその氣分は、十二月一月に於けると殆ど變りがないが、やはり二月だと思ふと、ツアッテンに美しい三角臺木にも幾分の暖みが現はれて居る。見晴しは殆ど皆無。今更昨日の天氣を羨み、或は出發の一日遅かりしを惜む。空沼行は中止。時間も始めての尾根としては遅いし、この信用のおけぬ天氣では、激變をも氣に掛けぬわけにはいかない。危険は豫想し得ぬにしても、迷路は何れもいやな谷である。こゝだけで今日は満足する事にする。一先づ白樺の樹林まで滑降する。スラローム向の傾斜であるが、波状雪に近

いこのクルステ面では、不愉快なステムボーゲンを餘儀なくされる。林の中に入ると、スキーは急に開放せられたやうに走る。一時細い雪がやつて来て、寒さを覚えて来る。エゾの木陰に休憩、中食をすませる。

同じ道を歸るよりは、さういふわけで定山溪に出る事とする。愈々空沼岳は暖い硫黄泉に變つてしまつた。冷水澤を降る雪は次第に濕氣多くなる。重いけれども甚しく深くなく、滑り悪く谷も單調であるが、それだけボーゲンに世話がいらいぬ一しきりブツシユの中を縫ふやうにして、三時には豊平川本流に沿ふ。天候も恢復しかけ、暖くなつた。蒸されたやうな皆の顔は汗ににちんで、滑り悪い平地滑走の爲に腕もだるくなる。一時間後には元湯ホテルに入つた。

心地よい廣やかな浴槽、夢なき眠りを包む百疊間は、容易に今日の疲れを癒してくれた。翌日は目覺むるやうな快晴。烏帽子岳の痛快なボーゲン向のスロープ、三段山のいぢわるい表層クルステ等を滑つて、琴似を経て歸札した。

### 三 月 (空沼岳、狭薄岳)

春の青山温泉行の連中を見送つた十九日の朝、歸るや否や直ぐに仕度をして豊平驛に駆付けた。午後一時石切山驛に降りて今盛んに融けつゝある雪道を、眞駒内川上流湯澤に向ふ。馬の足跡が雪面に甚しく凹凸を作り、歩きにくい事甚しいそうかといふて未だスキーを穿いても、その歩行努力は減却せられそうもなかつた。あたりの低い連丘は、減雪の爲にひどく醜くなつて居る。よさそうなスロープを持つて居るが、今の滑走には適しない。恐らく二月頃も駄目であらう。日光がかなり強くて、肩のスキーは軽からぬルックミ共に背中を熱する。夏の日でも受けるかの如き感がある。二時近くスキーを背負ひも、ほゞ嫌になつて、平地滑走に移る。雪はノルマルの所謂春雪で、水氣の多いザラメ雪である。滑りは割合に好い。併しスロープを見付けて直滑降をやつても、一向快いスウイングを爲し得るスピードは出来ない。殊に南面のスロープは所によつては、融解の度の極めて速かな爲めに、スキーの沈降の猛烈なる極めて多孔質なる雪になつて居た。泥状雪といふべきやつだ。悠々と滑つて来た所が急にその雪に出逢つて、身体の平均を失ひストップも不能に墜り危く轉倒する所であつた。

伐木出し橋道が入つて居て、奥の小屋にはあてにして居た通り人が居た。焚木の心配もなく安心して附近のブツシユをくどりに行つた。森林中の雪は数日前の雨の爲であらうと思ふが、猛烈な表層クルステになつて居た。エゾの緑葉越しに

落ちた水滴が雪の表面を甚しく濡らし、之が夜の冷却によつて氷のやうに固くなつたのであらう。エゾの茂みがないならば、春の日光によつてそのクルステ面は融解し、夜再び結晶して、極めて良好の滑走感と與ふるテレマーク、クルステとなる筈である。併し三月といふても四百米の海拔を有する此處は、日中に於ても夜に形成せられた表層クルステ面が融解する程の温暖さはない。且日光の直射は森林によつて妨げられ、クルステは晝夜殆ど同一の状態を保つて居るのである。ギラ／＼に輝いて居る所さへあつて、スキーの操縦は勿論不自由である。一寸した急坂で、目も當てられぬ醜態を演じた。敷出しが十人程居てかなり賑やかだ。此處は火防線地帯に當つて居て、少し前までは樵夫も大部入つて居たそうだが、今は小數の敷出しがその跡仕末をやつて居るだけだ。そう思ふと又冬の伐木當時の澄潤たる光景が忍ばれて、今の樹聲面白く働いて居る様子も、何さなく寂しさうに見える。

小屋の近くの小さなスロープに幾條さもなく、蚯蚓の這つたやうなシュブールが附いて居たのを見付けた。何でも樵夫だが餘暇に滑つた跡であること。未だ白樺の自製のスキーが、單なる遊戯用としての外に何等用をなして居ないにしても、スキーは既にかゝる所までにも擴がつて居る。やがて我々がスキー未踏と信じつゝ進む谷に於て或は尾根に於て山子によつて印せられたシューブールに遭遇する時の來るのも、遠い事ではなからう。

學年試験終了後の未だ寒氣に馴れぬこの都の身体も、さうにか焚火の暖みで眠り得た。翌朝は五時半出發。狭薄までの縦走があるから早く出る。雪は一層固い。グラ／＼するスキーで擲付けて登る。異様な音が谷間に響く。角付が困難の爲にジツクジツクを切るのが嫌だ。氷のやうな表皮を持つて居る雪の所に來ては、スキーの傷けられるのが眼に見えるやうで、氣の引けること夥しい。幸し傾斜が緩いからどん／＼進んで行かれる。又ブツシユもひびくなく大いに助かる。六時半主峰が顔を出す。日當りの好きそうな所は快い鹽のやうなザラメ雪になつて居た。シュブールの氣持よく付く事は、冬の粉雪以上である。勿論ラツセルの苦しみはない。之に引續いて雪は全体として一變するやうになつた。理想的な殆ど濕氣を知らぬザラメ雪。スキーの滑りの好い事、角付の快い事等は知らず／＼の内にキツクターンを忘れしめる。樂なヂツクヂツクが暫く續く。水源地附近の急坂も、一寸雪が深かつただけで何の變りもなかつた。

谷から尾根に出た。喜び勇んで眼前のホルン目掛けて進む。九百米等高線の所あたりから、所々に更に變つた雪が現は

れて来た。それはスキー靴では破り得るが、エツヂは殆ど立て得ぬ氷が、薄く粉雪に蔽はれて居たのである。氷の表面は相當粗糙になつて居るから、スロープのゆるい間は今までの雪とは努力に於て何等變る所ないが、之がホルンの急斜面にも形成せられて居さうで心配だ。それでも雪を選んで登つたらと思ひながら、四十度許りの所を十米程登る。そして例の氷の所に來て足が動かなくなつた。スキーを脱げばよかつたのだが、癪にさはつて別の方から登る事にする。さてドーム下まで降りやうとしたが、こゝにエツヂ無しスキー、アルパイン式スキー及び我々の技術の欠點が遺憾なく發揮せられた脆くもステミングに失敗して、僅かの横滑り後申し合せたかの如く、空沼岳東斜面を滑り落ち始めた、早速この時ごさんなれと、ストックをしっかりと握りしめ滑落防止の練習をやつた。

この斜面の状態は青山合宿中僕等が廿三日に第二馬鹿山とかで経験したのと同じであつた。その時は表層の粉雪が少し多かつたので、先頭にあつた自分だけはどうにかスキーを脱がずに通過し得たが、この氷の上に積つて居る雪の性質によつては非常な注意を要する事がある。長い急傾斜面を有する氷雪面に、新たに厚く積つた粘雪は甚しく容易に雪崩れ得べき状態にある。要するにこのいやな雪は、春に於ては割合にノルマルなものとならなければならぬかもしれぬ。

それからホルンを右に廻つて、軟雪を利用して札幌岳に續く尾根に出て、白樺の中の硬雪を渡つて八時五十分頂上に立つた。朝から少しの變化もない曇天ではあるが、眺望は理想的である。惠庭の怪異な姿の後ろに、碧水に充ちて居る支笏の見たのは何より嬉しい。それを隔て、樽前の軟かなスロープがフツプシのかけから現はれて居る。漁川上流地の森林中には處々バラダイスを認め得る。近くの漁、狭薄、札幌岳等のサークルの外に、マイネシリ、キモベツ、余市岳等の雪峰が、更に遠く蝦夷富士の處女スロープが灰色の空に眞白な輪廓を示して居る。偉大なる白銀の波がうねつて、眞黒の針葉樹林の上にそゞり立つて居る。それが北海道の雪の山である。それは全て登るべき山と云ふよりは雖も滑降すべき山である事に氣が付いた。

食後狭薄岳に向ふ。尾根の雪はやはり良好なるガラメ雪と、先刻いぢめられた氷のやうなやつである。スロープは緩いから途中の登降は案外容易である。氷雪面の滑降は三脚滑走でぎん／＼パスして行つたが、一ヶ所閉口した降りて出逢つた。其處は地圖(定山溪)の上では一〇四峰に面した西斜面で、一面の蒼氷になつて居た。偃松が露はれて居て、それが蠟細工のやうに氷に固められて居る。傾斜は十度位であるが、氷に對する準備をして來なかつた我々は、此處の通過はみ

ぢめなものであつた。直滑降、エツチングは元より、ビツケルでなければ全然刃がたゝぬ。短い斜面であつたから、幸ひ氷の上を尻でこすりながら、どうにか一〇四峰の下の谷に降りる。此處だけが、全くの氷になつて居たと云ふ事は、どうのう風の吹きまはしか知らぬが、面白い事である。成因については深く考へて見なかつたが、之も數日前の雨の日に成つた事は確かであらう。

一しきり谷間の良雪に痛快な滑走をやつて、愈々札幌岳に通じて居る廣い尾根に分れて、全く狭薄に向ふ。こゝから尾根は全然ガラメ雪のみになつた。硬雪に感興をそがるゝ事は絶対にない。六尺四寸は無性に軽く動く。一步一步と踏み出す足に、快い抵抗を與へてくれるのは、後滑りを殆ど例外無しに促す冬の粉雪に優る所。粉雪は滑降向きの雪ではあるがこの日光に破壊せられずに適度の乾燥性を有するガラメ雪は、降りに適すると共に更に登行向きの雪である。中山型のスキーギツフェルに於ては、正午前後はスキーを濡し易き滑り悪い軟雪、三時近くよりは忽ちフィルム、クルステとなつて痛快なスラロームを與へてくれぬのをノルマルとするこの三月に、かくも立派な雪に出逢ふとは、我々は全く幸運であつた。かゝる種類の雪は一シーズン中、多くて二三度、少ければ皆無。それで満足しなければならぬのである。

山の位置は大部變化して來た。空沼の背面が白樺に醜いのは物足りない。漁岳との間には大きな空沼入澤の盆地が展開された。札幌岳には鼻がつかへそうである。雪庇の關係で、尾根を遠く右の方にまはつて、狭薄の白樺の混んでる北面に、稍注意深いヂツクザツクを切る。白樺に咲いた樹氷は既に實となつて、それが著しく雪面に撒き散らされてある。大きさはドロップス位。シユプールの伸びる毎に、ザラ／＼と異様な音を立て、急坂を轉り落ちて行く。雪は好いからドロップスも何の邪魔にもならぬ。

雪が悪化しかけたと思ふと、もう自分等は今日登るべき最高點に立つた。十時半。狭薄の尾根に出てから一時間、全く最良のガラメで通したのは珍らしい。來シーズンの訪れまでは、到底壽命のなさそうな三角臺は僅かに残骸を山頂に横たへて居る。平穩の空にも惠庭のドームに一樣の雲がかゝり、風も出て來た。直ちに歸途につく。白樺の間を縫ふ各々四對のステムボーデン。ゆるやかな斜面に印せらるゝ緊張したスラローム。痛快の餘り一氣に滑降するを惜み、急激にストップする時のクリスチアニアの條痕。一瀉千里は雪の山を知らぬ者の口すべき語でない。

瞬く間に札幌―空沼尾根を越えて、スキーは自ら眞簾沼に向ふ。白樺まばらの廣い谷は、我々の心を引かずにはおかな

い。勿論雪は好い。沼近くに至つては、可愛い頭をもたけてゐるエゾ、白樺の幼木林が暫く続く。ゆるいスロープではあるが、時に朦朧としてスキーのスピードがさつぱり分らなくなつた。知らぬ間に身体が止つた時には、身体の平均を失ひさうになつた。殆ど眠りの内に、眞簾沼の純白な平面が前面に展開せられる。何となく不安の内に身は沼上におし出され今や全くホリゾタルの雪面を滑る。良雪に乗じストックのみで身体を前に推進すれば、四圍の原生林の威厳ある姿、荒涼の美が静かに廻轉して行く。振り返れば先刻辿つた尾根の雪庇の連りは、次第に遠くなつて行く。このあたりは實に夏の幽邃静寂の美にも増すとも劣らざる一ユートピアである。

やがて沼をはなれ、密林に入り、暫く拘束せられ勝ちのストラロームで降る。と共に雪は悪化し始めた。今朝擲きつけながら登つた時の硬雪なのだ。宿泊した小屋には寄らぬ積りで、最も右に寄つた澤を降る。急坂に再びみぢめな降り方をす。硬雪にエツヂが立たぬ所へ、又アルバインの欠點が遺憾なく發揮せられる。一時間許りひどく弄ばれた。又水が現れるやうになつてから、STEMINGの失敗で自分は水中落下をやつてしまつた。腰から下は全く洗禮を受けた。水が靴の中でチャブ／＼する。氣持の悪い事此上もない。まあ之がマイナス何度の寒中での出来事でなくてよかつたと話し合ふ。勿論冬ならこんなエツヂの立たぬ雪は、谷間では逢ひたくても無いのが普通だが。

冷たい身体で一時半橋道に出る。雪は濡めほくなり、痛快な橋道滑走は不可能だ。空模様は更に悪くなつて、春の新雪が盛んに降り出した。本流に沿ふた道を再び小屋まで戻つて、濡れた衣、靴を乾かしながら休憩す。雪はやんだが之から石切山までの三里半は、そう樂でない。明朝歸るこゝにしようかとも思つたが、友は昨夜の寒さで歸札を望んで居る。塗蠟して下山する。

それから二時間半、喜しい平地滑走を續けた。疲れた一仕事終えた身体で急ぐのだからたまらない。新雪の上はまだ好いと思つて居たワックスも、十分とたゝぬ内にはけて、スキーは遠慮なく重くなる。飽和にまで水を含む滑り悪い馬道は如何に凹凸はけしくとも、我々の取る道としては之が最上のものであつた。日は暮れた。幾度か暗黒の中に無言の顔を見合せながら、七時四十分漸く終列車に間に合つた。

#### 四 月 (空沼岳、漁岳)



光 と 影 (五色附近) 岡 部 長 量

札幌には全く雪を見なくなつた四月廿一日。再び空沼入りを行ふ事となつた。雪量の少い札幌岳連山も五月初旬まではまだスキーで樂であつた。ゴムメルスキーの合理的使用は猶五月末の登山をも容易ならしむるであらう。

湯澤の小屋までは呑気な春の旅である。道路は雪解の水が乾かぬので、所々大變悪い。日も長いから、道草を食ひながらゆつくり進む。空沼岳のまだ真白な姿を見た時は嬉しかつた。惠庭の眞黒なシユピツツが前面の黒い森の中に吸ひ込まれて行つた。

湯澤三〇〇米程の所から急に道路は一面の白雪に蔽はれて居た。日一日消えて行くこの雪も餘命幾許もない。森林に入り、先に来て居た別のスキー隊に會ふ。その友等の泊つて居た小屋は、三月には積雪の爲に堀り出さなければ入れぬ程であつた。併し今はこの一ヶ月の間の減雪で皆は樂に入居して居た。我々は小屋を別にして泊る。山子は一人も居ないが薪は豊富で、三月に比してめつきり暖く、樂に寝られた。

翌廿二日同様の好天氣。雲雀の勇ましい聲に眼を覺す。寒さに震える事もなく、氣持よい本當にのんびりした春の朝の氣分にひたる。

六時半出發。雪は夜の寒冷の爲めに三月に似た表層クルステを暫く保つて居た。やはり歩みにくいが幾分三月より軟く、シユプールが少し附く。七時先行のグループに追付き、全く三月と同様なコースを進む。

こゝで一行の穿いて居るスキーは四尺七尺となつた。そして之からこの行に於ける、長いスキーとゴムメルスキーとの利害得失を目のあたり見せつけられた。スロープのゆるい間は、どうしても長いのは堂々たる登行が出来て、見て居ても氣持が好い。殊に良好な滑走態を興へる場所にあつては、明かにゴムメルスキーはカンデキに一步近づいて居るものである事を考へしめる。併し水源地あたりから、そろ／＼急なズントに取付くやうになるに長いスキーはエツヂング、開脚登行等は四尺スキーより不便になり、狭い谷等に到るとクルステの爲めに全然登行不能になりかけた事があつた。止むを得ず六尺以上の我々だけは、スキーを脱いだ。併しその表層クルステは靴の沈降甚しく、どうしても夏スキーの人々と歩調が合はぬ。一般の困難をまぬがれぬ。幸ひ其處は短か／＼つたから好かつたが、長い急峻な狭い谷ではどうしても六尺スキーの際には、別にカンデキの携行を必要とする。

尾根に出ると雪は濕氣ある軟雪となつた。勿論サラメ雪である。朝日に向けてどん／＼融けて行く。スキーを濡す爲め

に、急角度に登り得るし又登らざるを得なくなる。結局長いスキーは急坂登行には不利なる。即ちスキーが長ければ長いだけ、水分の含有量が多くなつて、無駄の努力が必要になるからである。そこへ行くと夏スキーは軽妙な物だ。スキーの沈む事は殆どないから四尺の長さで充分である。之からは雪はずつと一様で、水分が増加した以外は何等の變化はなかつた。ドームの急斜面に少し苦心して、九時半三角點を極む。

風も殆ど無くなつて、平和な気分が充ちて居る。陽光に當つてちつと全身の筋肉を弛める気分は、雪なき秋に於ても味ははれそうもない香気がある。ゾムメルスキーの友は頻りに半径二三尺のテレマルクのトレースを畫いて見せる。山頂近くの偃松の露出、遠くはマイネシリリの黒い岩の斑點或は残雪の波低くうねる石狩の平原は、如何にも春の融け行く雪を物語つて居る。

十時半、札幌岳縦走のグループは、シユプールの分つて漁岳に向ふ。春の日に當りながら廣いのかな尾根を進む。二つの鞍部を除けば平凡な尾根の平地滑走で、容易に漁のドームに達する。日光、氣温によつて益々水氣多くなる雪はかなりスキーとの摩擦が大になる。所々偃松の間を縫ふた事もあつた。此處では再びスキーは長い方が適當なる。緩傾斜の降りには、兩者の努力の差が明かに認められた。

複雑な急傾斜を多く有する尾根の縦走にあつては、三月も夏スキーを欲するのであるが、ゆるい起伏を以て終始して居る所にあつては、少くともこの札幌岳連山では長いスキーで充分である。即ちこの山の四月に於ては、六尺内外の軽いもの（一貫目以内）を最良とする。ロイプアーは決してゾムメルスキー使用を急いでならぬ。目的とする山の状態によつては、冬も雖もゾムメルスキーを欲し、五月も雖も七尺スキーを欲するであらう。

十一時、最後の谷を隔て、漁の大きなスロープが手に取るやうになつた。針葉樹の中に急角度のスラロームで稍汗ばんだ身体を冷す。冷しい日光の直射なき森林中は流石に雪が良い。三月の雪に近い。白樺の林をくぐり愈々漁岳の純白山膚に取掛る。林を出ると漁の北面スロープは一部分固くなつて居た。而も其クルステは、ザラメ雪でなくて、稍粘着性ある粉雪が風に吹きつけられた状態のものである。軽い波を形成して居るが、シユプールの案外樂に附く。緩傾斜を選んで第一峰の肩に出て、ゆるい登りに偃松渡りをやり、十二時半最高點に立つ。三角點は少し低い第三峯にある筈、南方の眺望が自由でないのだけが物足りぬ。此處からは裏庭は最も近く、物凄く數條の雪溪はドーム下から二千尺を急下して居

る。支笏湖の靜波を隔て、苦小牧に續く大森林の紺碧が珍しい。裏庭山下の幽湖オコタンベが、白雪に閉ざれ靜かに眠つて居る。

此處で再び支笏湖に出る一行と分れて、空沼岳方面に引返す事となる。偃松の上はそう歩きにくくないが、滑走は全然望めぬ。ドームにゆるやかに講かれた直滑降は、自分に取つては今シーズン最後のものであつた。今更分に過ぎたこの雪ミスロープが名残り惜くなつて、ボーデンも無意味にはやれなかつた。元のシユプールの道つて平地滑走一時間、空沼ドーム下に出る。空沼ドームの東南面は雪崩れて居た。

さあ之で一轉びの後には小屋に着ける。ザクザクに濕つて居る雪の上にねそべつて、汗で鹽を噴いた顔を時々雪の中に突込む。そして顔を見合せては、半日の中によくもこんな黒くなつたものと驚く。友は日光で化粧しやうと、終日帽子を被らずに居た。春の山は黒人を急造する。

二時下山。雪は軟くなつて居て埋り易い爲め、夏スキーにはスピードが不足である。その代り急坂でのボーデンは如何にも容易さうだ。小さなのをやたらにかいて居た。朝固くてスキーを脱いだ所も、この暖氣ですつかり軟雪となつて居て樂に降る。水氣を眞の飽和にまで含む結晶雪は、緩傾斜となるに従ひ益々我々の不愉快さを増加した。

馬糞の上の雪の限界の差で、一日中にひどく減つた雪に驚きつゝ、三時半小屋に着く。スキーを脱いで濡れた足を乾かし、靴を換へて再び三里半の土を踏む。昨日スキー靴をルツクに縛りつけるのを忘れて、途中スタンダードから東京の○屋の破れ靴を借りて來たのが、今日少し雪が入つた位の不便で済んで、無事漁まで行けたのを今更大變喜んだ。靴は小さくて靴下一枚しか用ひられなかつたが、スキーがアルバインであつたから操縦の困難は無かつた。

石切山で乗車し、札幌岳行の一行に會つた。何でも熊の足跡を見たそうだ。札幌岳から簾舞に出たのこゝ。

支笏湖行は小漁岳を経て、尾根をオコタンベ川に出て、その夜九時丸駒温泉に着いた。小漁からの尾根は殊の外雪が少くなつて大部困難しらしい。支笏湖附近のスキーは四月初旬で切り上げねばなるまい。

(八九三・八三〇)

# 山 想 斷 章

加 納 一 郎

冬

丹波高原は大した高さを持つて居ないけれども北の方から、著しい高低もなしに山城の平原にまで連つてゐる。比叡のいたゞきから、此を眺めると、どこまでも、どこまでもその山なみがつゞいてゐる様に思はれるのであるが、冬、此等の山々が、すつかり雪に蓋はれてしまふときには、眞白な波が、うちよせうちよせするかの如く、親はしく感じを覚え、頂のこがらしの寒さをも忘れて立ちつくすのであつた。また四明岳の植林は稚くて、さしたる量でもない二月の雪に、やつと頭だけを出しては、震えてゐた。四明岳と云ふのは比叡山塊の最高峯である。

こゝから京の街を見わたすと、家々の屋根も弱い冬の日に薄れて、夏の午後、それらの中から天窓のガラスの強い反射光線が目がちらちらする様な事があるが、今はそんな事は到底見られない。たゞ落ちついて、冬の憩ひに在る、古い部のゆかしさが何となくしのばれる様である。その街を、賀茂川が同じい水を流して貫いてゐる。鐘の詩仙堂に居た石川丈山云ふ人は、そのかみ、それがしのむわりにて、生涯賀茂川を渡らぬちかひを立て、京の街に出掛けるには、いつも丹波の山々を廻つて行つた云ふ話を思ひ出して、川の上流に眼をやりながら、誰も自分ひとりだけの心に持つ惱ましさに就

て考へさせられるのであつた。

延暦寺の伽藍は喬い杉の木立に周まれて、薄暗く立つてゐる。神秘の法燈が、中堂の奥に、さゆらぎもせず、點つてゐる。闇の中にちつと浮いてゐる様である。冬の日も、稚い僧は、その廻廊をみ教の爲に往き來するのであつた。用もなしに、此の二月の寒空に雪を分けて訪れ來れる登山者は、此の人達には、親はしい浮世の使者であるふか、それともいぶかしい魔界の夜叉であるふか。

\*

一人の小さな旅人は峠から吹きをろす風に、行き悩みつゝも、雪を求めてひたすらに歩むのであつた。それは諏訪から小諸への往還である。烏井峠、鹽尻峠を超えて來た此の旅人は和田峠を目ざしてゐるのであつた。それはまたその日のうちに諏訪に還つて、次の日は富士見峠に行こうとする。此の一月の初めの幾日かを、雪の山々の觀望にと志した旅の一日であつたのである。そして彼はその旅を、烏水の『日本アルプス』に教へられたのであつた。

風は強い、雪は進むに従つて深くなつてゆく。雪を知らない彼にとつては、新しい体験の悦びであり、且又一の怖れでもあつた。此の重要な峠も、年の更まつて日も浅い時である爲か、行き合ふ一人の人もない。隣りの澤に薪取る斧の響をかすかに耳にした他は、人の氣配を絶つて、眞白な軟かい雪の上に、灰色に映し出される自らの影より友をさするものなかつた。

埋る一歩一歩を運んで峠の頂に着いた頃には、暮るゝに早い冬の日は西に傾いて、國境の山々は陰面を向けてゐた。槍の尖峯！乗鞍の豐翼！そんなものは今更、記すも、愚かである。此等の山々にしか見られない。そしてもう吾々にはいつても盡き得るところのあのスカイラインが、桔梗ヶ原の彼方に、嚴かに在るのだ。そして皆後の手近の斜面は、彼が生れて始めて見るところの、淡いアーベンドグリーンに染められてゐた。それは折角こゝまでやつて來た、自分の爲に、たまにしかせぬ化粧をしてゐる様に思はれたのであつた。

身は疲れてゐるよふさも、心はいきいき自然の糧をとり入れた。數々の山旅の想出が、夫等の山々を四顧のうちに見る此の峠の頂に於て、小春日の縁側に糸車より操り出さるゝ糸の如くに過ぎる。更にそれが冬の姿に於て劃き更えられ、新し

ライデンシャフトを生み出す。淺間、八ツ、地藏、鳳凰、駒、木曾駒、御岳、乗鞍、穂高、槍、更に高瀬、籠川、黒部の水上の山々。此の三百六十度の眺望を幾度くり返したところであらう。なべて冷やかなる此の景観が、彼の心を如何に教へたであらうか。彼はまた黙々として下つて行く。

土に飽いた男は、雪を求め。雪に飽いた男は氷を望む。そう云つてシリベシマツカリヌブリの頂上へと志したのであつた。而し陽光の恵みうすい北國の二月ではまだ、碧い氷はそう生長はしてゐなかつた。而し灌木を束にして固まりついた雪塊の連りの中を、風に吹かるゝスキーを以て縫ふて行くことは可なり努力であつた。吹雪の雲の中にわけ入つたせいか、ちつとしてゐるこゝ、雪達磨になつて動けなくなり相である。ひどく視界を狭められたる今は、水底深く沈めるが如く、上も下も、前も後もたゞ此れ雪。九合目から六合目へのコンヴェックススロープを相つゞいて降る様は、右に左につく、上も下も、前も後もたゞ此れ雪。張りつめた氣でステムボーゲンに無中なのである。皆の心はいついと飛び交ふ姿のみ見えて、動揺する幻の如くである。張りつめた氣でステムボーゲンに無中なのである。皆の心は思ひ思ひに馳けて居る様で、而も目に見えぬザイルでもつながれてゐるのか、さびぬけて離れるものもなく、あまりに近く近よるこゝもない。同じ程の間隔を置いて、休みなく、此の滑降圏は幻の世界を進むのであつた。樹々の梢が、風の強暴から、吾々を助けてくれるまで、息をもつかぬ營みがつゞく。そして終に、常録の森々に抱かれるこゝ、初めて現實の世界を意識して、氣温に悩み、また食欲に馳らるゝのであつた。シリベシマツカリヌブリは多くのスキーロマンスを残してゐる。そして此のスキー登山が企てられるごとに、それらの諧謔のうちに教訓に富んだ話が操り返さるゝのである。それはいつも人間と自然との畫くローカスであり又美しい雪草紙である。

ヌタクカムウシユベの麓を包む一帯のコニファーは亂伐と、山火に虐けられた北海道の森林中であつて、危うく取り残

された原生林の一つである。その豊満な壯齡木の各の樹冠が、靜かに降り積つた雪に飾られて、谷又谷と續いてゐる中をきのふもけふも、同じスプールをつけて辿つて行く一群のロイフェルは、その最高峯であるところの、旭岳へ志してゐるのであつた。

峯はきのふと同じ様に曇つてゐる。頭を出した岩が、空に浮いてゐる程ひどい錯覺をさへ與へるところの、陰影に乏しい午後であつた。今日もまた、この邊でスキーの先を轉じなければならぬかと思ふと、はかない氣もする。而し吾々がどうあるふとも、山は以前として嚴かなるザインであり、時もまた永劫の歩を刻む。假寐の小屋からこゝまで續いてゐる。そして稍もすれば風に吹き消され勝ちな條痕を、をほつかなかもたどる人間の滑降は、それ自らにとつて、如何にグレンツエンデ、アツプファールトであるふとも、四周の實在は何物をも觀ぜざるが如く冷やかである。ましてや此の闖入者の過ぎ去りし後を思へば、モルゲンロートに暉こうこも、嵐の夜に雪を積み、また吹き散らさうとも、彼は恒るこゝなく、強い存在である。いつの日、何んがそれを横切らふとそれは彼に何であらう。

二日の同じ登行を尙一日加へて、漸くにして蒼空の下に、ギソプエルを踏むことが出来た。昨日見た白樺の幹の傷は、今日も同じ様に見つた。浮いてゐる様に思はれた、小さな岩の頭が、思ひがけなくすぐ前にやつて来る。ギソプエルにとりつくと、スキーをぬいで、登つて見た。大きなコルニスに雪が飛んでゐる。それが爆烈火口の瓦斯と競ふて高く青空にきえて行く。見えない何か、天空から、それを吹いてゐる様である。

一本の大きなナラの木の枯幹が峠のひろやかな鞍部に、立つてゐて、それがこゝにお前達の憩ひの小屋があるこゝ知らしめて呉れるので、緩い傾斜のつゞいてゐる此のあたりのスキーローテでは、可なり遠くから、もう近づいたなこゝ云ふ容易な氣持をもつことが出来る。而し稍寒い風の吹く日の暮れ方、その小屋に達した。小屋には水もない、薪もない。だが樹が雪が、思ひのまゝに擴がつてゐる。たゞ時の歩みをさだめ得ぬ悲哀に追ひたてられながら、ベチユラを破り、火を創らねばならなかつた。

やがて大きな炎が古い爐の中に燃えあがり、煤けた屋根裏を氣味悪く照らす。温かい夕餉の後には、あつましい沈黙

が来る。

去年の春、此の小屋のたゞ一人の番人が病に臥し、訪ふ人もなくて終に、息を引きとつたのを幾日もの後に見出された。云ふのを思ひ出しては、隣室の屋根からもる、雪解の滴のほたり、ほたりと落つる音に、戯れにをのゝぎ、相倚つて語るものもあつた。人環を離れたこゝにあつては、吾々の仲間より他にはお互にたよる何人をもよたない。それは限りない淋しさであり、同時にまた親しさでもあろふか。

春の中山峠は札幌より一日で達し得られる云ふ便宜を他に於て、ホツカイドスキーロイフェルにまつては最上のパラダイスである云ふことである。實にそこはなだらかな傾斜面が、鬱閉の適度なナードルズドに護られてゐて、四月になほブルーフェルシュネーを持つのであるが、尙その上に、數多くのターゲストウーレンをなし得るのである。

焚火に映える友の顔を眺めつゝじいつと、たゞこつた無上の時を持つことの悦に充ちあふれつゝ、夜を送ることの限りない慰安は、自らの雪煙に身体をつゝまれながら滑る感激的な直滑降のあの強い魅惑からさへ、吾々の心を引きはなすのである。

かくして、次の日も、次の夜をも、雪を楽しみ、火に恵まれつゝ此處に送り、そのシーズンの最後の滑走を味はひ、心を安めたのであつた。

(一九三三・一〇・一〇)

## 西部北海道に於けるスキー地

平塚直秀

スキー地の良否は、その地方の積雪量及び気温に關係するものである事は論を俟ない。故に、北海道に於けるスキー

一好適地を論ずるに當つて、先づ北海道各地の積雪量及び冬期の気温の大体を書いて見やう。

北海道を氣象上から、四大別する事が出来ると思ふ。

- 一、南海岸地方(太平洋岸地方)
- 二、西海岸地方(日本海岸地方)
- 三、東海岸地方(オホーツク海岸地方)
- 四、北海道内地(上川地方、帯廣地方)

今以上の各地方の冬期に於ける積雪量及び気温を知る爲めに、道内七箇所の測條所の統計を掲げて見る。

冬期に於ける北海道各地に於ける平均気温

測候所	十二月	一月	二月	三月
札幌	0.7	-3.1	-2.8	-0.8
帯都	-0.5	-3.9	-2.6	-0.1
札幌	-3.0	-6.2	-5.0	-1.6
十勝	-6.3	-10.2	-8.6	-4.8
上川	-5.6	-10.4	-8.8	-4.7
釧路	-5.3	-9.2	-7.4	-3.8
網走	-2.8	-6.9	-6.7	-3.6

(據氏 累年統計)

冬期に於ける北海道各地の降雪量

測候所	十二月	一月	二月	三月
札幌	60.2	21.5	18.9	48.2

測候所	最高	最低	平均	積雪量
札幌	12.5	97.6	94.0	66.7
帯都	91.4	75.8	64.6	67.0
札幌	40.5	25.1	45.1	38.7
十勝	100.1	77.6	42.3	59.1
上川	63.9	33.4	34.4	70.7
釧路	46.5	20.5	23.3	36.1

以上の統計に依つて見れば、気温は、札幌、札幌に於て比較的高温で、次ぎが襟裳、釧路、網走、最も低温なるが、上川及び帯廣(十勝二等測候所所在地)である。即ち、西海岸地方は、對馬海流がその岸に沿ひて流るゝが故に、比較的高温であるが、東海岸地方は、北方から来る寒流の影響に依り比較的低温である。又、上川地方、帯廣地方は、海上氣象の影響を受けないから、四季並びに晝夜の温度の變化著しく、上川の如きは、夏季本道の最高温を顯はすと共に、冬季は、本道の最低温を示して居る。

然し、その地方の低温の度と、降雪量は、必ずしも平衡しない。かへつて、正反對の現象を呈して居る。降雪量(冬期に於ける降雪量を、殆んど、大部分降雪量と見なしてもよいと思ふ)に付いて比較して見るに、帯都、札幌の西海岸地方最も多く、上川地方その次に位し、その他は以上に比して、少量である。太平洋、オホーツク海岸地方は、總じて降雪量が少ない。

次に、比較的温暖なる西海岸地方の、雪質を考ふるに、一月二月の気温は、札幌、壽都のそれで見ると、零下三度乃至零下六度である故、良好なる事を推論し得る。

一般には言へぬかも知れぬが、北海道に於ては、気温の高低は度外視して、積雪の多量なる地方を以つて、スキー好適地方と云ふ事が出来るだらう。此の點から見て、前述西海岸地方即ち日本海岸地方をもつて、北海道のスキー好適地方と云へやう。以下同地方特に、札幌以西のスキー地に付いて述べる事にする。

#### △△△

ここで、西部北海道とは、便宜上札幌以西にして主に日本海に面した地方を、一括して假りに名づけたのである。西部北海道の主なるスキー地を、左の各地方に分けて、順次に略記して見る。

- 一、倶知安方面
- 二、小樽方面
- 三、札幌方面
- 四、定山溪方面

倶知安、狩太の原野に孤立せるマツカリヌブリ(一八九三

米)及び、尻別川を隔て、ニセコアンヌブリ(一三〇八米)を主峰とする一群の連山の、二者を中心とせる一帯の地を包括して見た。この方面は、前述の如く北海道でも、積雪量の多い事で有名な地方で、従つて融雪期も他地方に比して大分後れる。又、一月二月の候は、サイベリヤからの北東風強く、殊に吹雪が多い。

#### A、青山温泉及び附近

抑々、今から六年ばかり以前、イワオヌブリの硫黄鉱山(イワオヌブリ八合目に在り)を経て、あのニセコアンヌブリの裾のロープを、滑降して青山温泉に着いたシローイファアのグルツベがあつた。これが、この附近をスキーで滑つた初めだつたのだらう。ニセコアンヌブリの広いスロープ——ニセコアンヌブリを初め、イワオヌブリ(一一五四米)チセヌブリ(一一三四米)その他の連山を、近くに控えたこの地はスキー練習場として申分ないところであつた。この翌年の冬期から、この温泉が、毎年北海道帝國大學スキー部々員の合宿所となつたのである。温泉は、入里離れたニセコアンヌブリ川の溪谷に、建てられた一軒家であるが、優に數百人の部員が合宿し得るだけの大きいミコで、種々の設備も可成り整つて居る。スロープは、温泉から約二軒位である。ニセコアンヌブリも、チセヌブリも、温泉を根據に、樂な一日の行程。岩内町に出る事も、イワ

オヌブリ礦山に行く事も出来る。礦山までは、近々八軒位しかない。又青山温泉の北西、メクンナイ岳の山麓新見温泉から、雷電山(一一二一、六米)に出で、雷電峠を経て尻別川河口北尻別にも達し得る。今年の三月下旬、イワオヌブリ礦山から、チセヌブリ——無名山(一〇七八米)——無名山(九八〇米)——メクンナイ岳(一一〇二、六米)——岩内岳(一〇八五、七米)を縦走して岩内町に出た記録もある。

ニセコアン、チセ等を登降して、注意を惹くものは、麓から、八九合目あたりまでの、エゾノダケカンバの純林である。針葉樹は、非常に少ない。白膚の明るいこの純林の中の登降は、實に愉快である。

青山温泉を、中心とせるこの地方は、融雪期が遅いから、四月中旬でも、愉快に滑降出来る。ズンメルスキーでならば、五月上旬頃でも、附近の山は登降し得るだらう。青山温泉は、函館本線昆布驛から、六軒ばかりある。同驛から南東約十二軒にして、昆布岳(一〇四五米)があるが、これもスキー登山の記録がある。

#### B、マツカリヌブリ及び附近

マツカリヌブリは、西部北海道の最高峰である。植物帯の判然と分かれて居る事、山容が駿河富士に似て居る事等で知られて居る。殊に、冬の針葉樹林は遠く望むだけでも

心をワクワクさせる。比羅夫驛に下車して登るのであるが、倶知安からも行ける。この山のスキー登山は、周到なる準備を要すると共に、技術の相當熟練した人でなければ不可能であらう。マツカリヌブリ山麓には、各所に良好なるスロープがある。南麓の留壽都、東麓の東倶知安等の市街地は、可成りスキーが盛んな様である。倶知安町から、イワオヌブリ礦山までは、道路がある。十三四軒位である。イワオヌブリから、真北約二、五軒ばかりのところ、一〇四五、八米なる無名山がある。「ワイズ、ホルン」名づけて居る山で、高くもないが、小澤へ一舉に約十軒直滑降で達し得。小澤附近にも、可成りのスロープがある。

#### 二、小樽方面

#### A、小樽市及び附近

小樽市内の最も一般的なスキー練習場としては、通稱、緑ヶ丘、聖ヶ丘等と呼んで居るところがある。理想的のスロープとは言へぬかも知れないが、市内に在ると言ふ特典があるので、多くのスキーファンが集るのである。緑ヶ丘は今年の春、大日本體育協會主催の全國スキー大會が催された場所である。小樽のスキー界が一般的に年と共に、隆盛になつたのは、一にその地形の然らしむるところである。郊外のスロープを以て、推賞するに足るものは、潮見臺の

中學校から南方約四杆の毛無山（五四八、四米）のスロープだらう。スロープも相当長い。

### B、大毛無、遠藤山

「毛無山」に言へば、小樽郊外の毛無山よりも多くの場合鹽谷村のそれを想像させる。小樽市の小樽高等商業學校の前を通り、地獄坂を越え、軍事道路を横切つて丸山（六二九米）の麓に出る。それから、丸山の腹を通つて、丸山と遠藤山と續いて居る尾根に出で遠藤山に到するのである。遠藤山は、陸地測量部發行の五万分一の地圖の、七三五、六米と言ふ山で丸山の南約三杆の地點である。遠藤山の名は、ノールウエーギツシユのスキー地として賞せられ、幾回となくこの地を訪れられた。故遠藤吉三郎博士にちなんで命名したものである。遠藤山は、北西の方向に尾根が延びて、約五杆にして毛無山（六五四米）となつて居る。遠藤山から毛無山を瞬く間に過ぎ、一擧に蘭島に向つての直滑降無慮十數杆、忍路灣を脚下に眞直ぐなシユプールを印しつゝ、良雪の日に於けるこの直滑降は、恐らく他に類がないだらう。札幌を早朝の汽車で行くと日歸りが出来る。

### 三、札幌方面

#### A・藻岩山、圓山、三角山及び北海道

帝國大學スキー部シャンツェ

札幌は、平坦だから、スロープは近くには求められぬ。郊外の圓山、三角山方面に行かなければならぬ。最も、アルゲマインなスロープは、圓山南麓一帯であるが、南に面して居るから温かい日は、雪がよくないし、又狭いと言ふ缺點はあるが、市内に近く行き易いので賑ふ。市設の型ばかりの休憩所もある。圓山の西南麓から、藻岩山麓にかけて可成りのスロープがある。藻岩山（五三〇、九米）に登る人も多い。

スキーツアイト中の土曜の午後、日曜日の朝等は、札幌停車場の待合室はスキーロイファーで、にぎやかである。その大部分は琴似、輕川へ行くのである。殊に琴似行きが多いだらう。これ等は、皆三角山山麓一帯のスロープに行く連中なのだ。琴似で下車し、一直線をなして居る道を南西に一杆ばかり行つて國道に出で、農事試験場の種苗圃の側からスキーを穿いて、斜右の方向に向つて尙約一杆平地滑走をすると、突つきのスロープが、「シルバー、スロープ」である。このスロープを中心に三角山山麓には、多種多様のスロープがある。三角山（三一一、七米）の下降も愉快である。

三角山北麓に東北に面して、北海道帝國大學スキー部のシユプールの固定シャンツェがある。現今に於ては、恐らく本邦唯一のものであらう。一月から三月中旬にかけて、

約二ヶ月間、こゝで部員のシユプリングが見られる。

札幌は、西部には近く山が連らなつて居るが、他は廣い平原に連らなつて居る。三月の候、堅雪の上を折から強く吹く生暖かい南東の風にまかせて、郊外で「セーリング」をするのも痛快である。

### B、手稻山その他

手稻山（一〇二三、五米）は、札幌に近く日歸りの登山には手頃である。スキーツアイト中、ひどい荒れでもない。日曜日等には、大抵五、六人又はそれ以上からなる一團が登る。登行の所要時間は、三時間半乃至五時間位である。山麓に近い通稱千尺高地（四〇六米附近）と言ふところから殊に良雪時には愉快な直滑降が出来る。千尺高地から、西にそれ、五〇一米を通り尾根を迂回して四二七米（通稱大曲の頂上）に到り、一擧に北東を指して、輕川澤を右に輕川市街に歸へるコースがある。通稱大曲と言ひ、一九二二一九二三の兩年このコースに於て北大スキー部主催の札幌中等學校のスキー驛傳競走が行はれた。

手稻山の頂上の北西約四杆のところ、陸地測量部地圖に依れば、九四九、二米と言ふのがある。これを奥手稻岳の頂上と呼んで居る。この方面に出掛けるのには、輕川の次驛、錢函驛からする。錢函から、奥手稻に到り、北西に走る尾根をたどり、八三八、七米に出で、和宇尻山（八四

四米）に達し錢函へ歸るコースもある。錢函から小樽内川の上流に出で、これに沿ふて定山溪に行く事も出来る。

### 四、定山溪方面

定山溪温泉を中心として、余市、ムイネシリ、キモベツ、札幌、漁、百松澤等の諸山を含めた。

#### A、余市岳（一四八八米）

この附近の連山の盟主である。登路は、二つある。余市川の上流、盤ノ澤から登るのこゝ、定山溪側の白井川上流元山嶺山からするのである。盤ノ澤から頂上を極めて、元山までは約三十杆あるが、この縦走も出来る。然し、良雪でなければ不可能だと思ふ。今年の四月上旬、ゾンメルスキーで盤ノ澤から余市岳の鞍部へ出で、定山溪面を下つたが、泊まる筈の元山嶺山は休山で、その儘元山から十四五杆もある定山溪まで、携帶用提灯を點じて夜道を滑走した事があった。盤ノ澤を根據地とし、余市岳から北東への尾根を朝里岳（一二八〇、八米）に到り、朝里岳から北西に續く尾根を下つて盤ノ澤に歸つた記録がある。余市岳から朝里岳に到り、北方に續く尾根を滑走して錢函に出る事も出来る。

#### B、ムイネシリ、キモベツ岳、中山峠

余市岳の鞍部から南に走る尾根は、長く延びてムイネシ

リ岳（一四六〇、五米）キモベツ岳（一一七六、九米）連山から成る縦脈をなして居る。これ等の密林で蓋はれて居る山々は、夏季に於ては登山者皆無の状態だが、冬期はシロイフアーのみに與へられた一大樂園である。

ムイネシリ、キモベツ兩岳の登路は、俱知安から分岐する京極線の終點脇方から八軒ばかりある黒橋（或は、少し、脇方に近い群馬團體の部落）からのと、定山溪側の元山嶺山からのさがある。又、中山驛遞を基點に縦走も出来る。群馬團體か、黒橋で一泊すれば、その翌日はキモベツ岳から、ナミカワヌブリ（新稱なり。並河功先生にちなむ）を経てムイネシリに出で定山溪に下れる。然し、定山溪に下らずに、中山峠（八三六、四米）の驛遞所に泊る事も出来る。驛遞所は、番人が居らぬから糧食は是非持参せねばならぬ。この附近の針葉樹林の中の滑降は、忘れられぬさうである。殊に五月上旬でも尙粉雪霏々たりとは、一寸京都會の人間の想像も及ばぬところである。

C、札幌岳その他

札幌岳（一二九三、八米）は、夏期の登山口と同様、定山溪鐵道の簾舞で汽車を降り、簾舞の盤ノ澤で一泊して登山

するのである。狭薄山（一二九六米）空沼嶽（一二五一米）もスキー登山の記録がある。空沼岳から漁岳（一三二八米）への縦走も試みられた。

△△△

以上は、たゞ概略に過ぎない。西都北海道のスキー地の詳細は、次ぎの諸氏の記事を参照せられたい。

- 一、松川 五郎氏 昆布岳登山報告
- アルペンツァイトウング（一九二〇—二二）
- 一、板橋 敬一氏 余市岳登山記録
- 同上
- 一、板倉 勝宜氏 ムイネシリ岳登山記録
- 同上
- 一、六鹿 一彦氏 スキー地としての蝦夷富士
- 「山とスキー」第六號
- 一、本田 治吉氏 青山日記
- 「山とスキー」第二十八號
- 一、岡村源太郎氏 雪の札幌岳連山
- 本 號

（一九二二・一〇・四）

『雪の名稱に就いて』の私見

六 鹿 一 彦

十月號に仙波氏の『雪の名稱に就いて』と云ふ有益な一文が載けられた。雪の種類をスキー術上一定の名稱の下に表示する事は實際必要な事であつて、しかもそれが今迄全然不統一の儘に放棄されてあつた事は、研究の盛なスキー界に於て全く不可解な事である。私は一度山岳か何かに雪の種類を分類して掲げた事があるのだが、此度仙波氏の

文を見て、再び私の分類法を持ち出したと思ふのである。それは仙波氏の分類法は、或點では私の分類法よりも詳細で、スキー術上より見て便利と思ふ點もあるが、未だ此れでは不十分な點があるから、彼我的長所を執つて尙一層完全に近い名稱を作り度いと思ふのである。幸に諸兄の参考となれば望外の喜悅である。

一	スキー底ニ粘着セザルモノ	粒	仙波氏案	粉	私案	粉	新私案
二	スキー底ニ粘着スルモノ	軟	雪	軟	雪	軟	雪
三	強風ニヨリ吹ホ固メラレタルモノ	硬	雪	硬	雪	硬	雪
四	表面ノミ吹キ固メラフタルモノ	硬	雪	硬	雪	硬	雪
五	永ノ如ク凍結セルモノ	凍	雪	凍	雪	凍	雪
六	表面ノミ凍結セルモノ	凍	雪	凍	雪	凍	雪
七	融ケシ雪ノ再ビ凍リテ粒狀チナセルモノ	粒	狀	凍	雪	凍	雪
八	水分多ク全ク濕レルモノ	泥	狀	凍	雪	凍	雪
九	滑ル雪ト滑ラヌ雪トガ班狀チナセルモノ	斑	狀	雪	斑	狀	雪

右の内表層硬雪と表層水雪とは雪の種類としては全然別種であるが、スキー術より見ては殆んど差異を認めないものである。斑状雪は硬雪又は水雪上に軟雪又は粉雪が斑ら

に集積されたもので、雪の種類としては特に別種とする事が出来ぬけれど、スキー術より見れば、特別に一種の名稱を附しておいた方が便利だと思はれるので採用しておいた

## 彙報抄録

### 札幌近山初雪

十月十一日朝札幌近郊の諸山は約四〇〇米の高さまで初雪に蓋はれた。スキーヤーは既に準備にとりかゝつた。

### 北大スキー部新着圖書

- Der winter 16 Jahrg Nr.13
- Beuson C. E.—British Mountaineering 2nd Ed. 1914
- Will and Carine Cadby—Switzerland in Winter
- The National Geographic Magazine August 1923
- British Ski Year Book 1922
- Oxford and Cambridge Mountaineering 1921

### 山とスキーの會現在會員

- 幹事 阿部 謹吾 常任幹事 赤松 勳
- 青木 三郎 伴 素彦
- 常任幹事 長谷川 敦 幹事 藤江 永次

- |    |         |      |         |
|----|---------|------|---------|
| 幹事 | 平井 左門   | 幹事   | 平塚 直秀   |
| 幹事 | 廣田 戸七郎  | 幹事   | 本田 治吉   |
| 幹事 | 稻積 猶    | 常任幹事 | 伊藤 秀五郎  |
| 幹事 | 岩森 秀夫   | 幹事   | 加納 一郎   |
| 幹事 | 小林 一勝   | 幹事   | 松川 五郎   |
| 幹事 | 三田村 健太郎 | 幹事   | 宮城 孝治   |
| 幹事 | 村本 金彌   | 幹事   | 並河 功    |
| 幹事 | 内藤 克三   | 幹事   | 中野 誠一   |
| 幹事 | 南波 初太郎  | 幹事   | 岡見 清二   |
| 幹事 | 緒方 直光   | 幹事   | 岡本 三男   |
| 幹事 | 岡村 源太郎  | 幹事   | 大久保 鐵二  |
| 幹事 | 大島 幸吉   | 幹事   | 大宅 農夫太郎 |
| 幹事 | 佐々木 政吉  | 幹事   | 須藤 英雄   |
| 幹事 | 田口 鎮雄   | 幹事   | 瀧田 次郎   |
| 幹事 | 内海 榮郎   | 幹事   | 山極 三郎   |
| 幹事 | 北大スキー部  |      |         |